

「学長インタビュー」編

異なる考えを持つ他者との協働で
未知の課題と向き合う力を培う

木村 務

(きむら・つとむ)
長崎県立大学
学長

経営学部、地域創造学部、国際社会学部、情報システム学部、看護栄養学部の5学部9学科を有し、実学的・実践的な科目を多く取り入れたカリキュラムが高く評価されている長崎県立大学。「新しい時代に挑戦し続ける人材」地域社会を創造する担い手・リーダー」の育成を掲げる同大学が、教育活動の中で重視していることは何か。2019年より大学運営の舵取りを担っている木村務学長に聞いた。

リアルな現場を体感してから
学ぶという流れも大事に

近年、大学に実践的な教育が求められています。どのような背景があると思いますか。

木村 先の見えない不確実な時代、企業や社会がこれまで経験したことのない事態に直面する場面が増えています。そうした中、教科書や参考書に書かれている既存の知識を身に付けているだけでは、実社会の課題を解決できなくなっている。今、大学には、習得した知識を実社会で「知恵」として生かせる人材の育成が求められていると感じます。

そこで長崎県立大学では、県内の離島でフィールドワークを行う「しまなび」プログラムを1年次に全学共通科目として実施している他、各学科でも企業や行政機関などでの長期インターンシップ、また海外研修を積極的にカリキュラムに組み込んでいます。一般的に、大学では

まず理論や原理を学び、それを実習、研修などで応用していきます。それも重要ですが、一方でまずリアルな現場を体感し、そこで必要とされる考え方やスキルを専門的な見地から学んでいく。今の時代、そうした逆の流れも大事だと私たちは考えています。

実践的な学びを通じて、学生たちにどのような力を付けてほしいと考えていますか。

木村 長崎県立大学では、卒業までに身に付けてほしい力を「KEN-SUN力」としてまとめています(左ページ参照)。例えば、「尊重と主張」は今後ますます重要になるでしょう。自分と他者は異なる考え、思いを持っている。これは、価値観の多様化が進む社会において大前提です。その上で議論、対話を重ね、互いに合意できる見解を見いだしていくことが求められます。

しかし、尊重、主張のどちらかに偏らず、コミュニケーションを取るのには簡単ではありません。そこで各授業の中で重視しているのがグループワークです。学生がチームで活動する機会を多く設け、協働することの意義を感じてもらおう。異なる考えを持つ者が同じ課題に取り組むからこそ、自分だけではたどり着けなかった解決策を見つけれられるということを実感してもらおうとしています。

その他、木村学長が学生の成長に必要なと思うものはありますか。

木村 私は、かねて学生に「どんどん失敗を聞かせてください。最後に、長崎県立大学の今後の抱負を聞かせてください。」

木村 あらゆる分野でグローバル化が加速する今、古くから世界に開かれた長崎に立地する私たちの役割はとても大きい。多くの離島が国境に接しているなど国際社会というものが非常に身近にある地の利を生かして、広い視野を持ち、他者を認めて行動できる人材を育成していくことが一つの目標です。

また、戦後一貫して平和教育に力を注いできた地域の大学として、世界平和への貢献も大事な使命です。引き続き、歴史に学びながら、新たな時代を切り開いていける人材を輩出していきたいと思っています。



企業などからの学生への評価はいかがですか。

長崎の地の利を生かした
人材育成を今後も進める

敗をするように」と話しています。初めにお話ししたとおり、今の時代は誰もが未知の課題と向き合わなければなりません。そこで成功し続けることは難しい。企業にしても、行政にしても、前例踏襲ではうまくいかないことが増えています。今求められていることは、いかに失敗を糧にして立ち上がるかです。その意味で学生たちにはたくさん失敗を経験し、タフさやポジティブさを培ってほしいと思っています。

長崎県立大学ディプロマ・ポリシー「KEN-SUN力」

長崎とNagasaki	長崎で地域を理解するとともに世界の中のNagasakiを知ること、グローバルに交流しながら地域・国際社会に貢献し、平和を創る力
知識と知恵	未来を生き抜く知識を修得し、それを知恵として活用する力
尊重と主張	他者を尊重するとともに、自己を主張し、協働・共生する力
想像と創造	物事を多面的・俯瞰的にとらえる想像力と新しい知を創造する力
挑戦と継続	未知の課題に挑戦しつつ、学びを継続する力
自立と自律	自立した生活と自律的な学びをする力

木村 おかげさまで、複数の企業から「長崎県立大学の学生は自分の考えをしっかり持っている」といった声を頂いています。例えば面接でも「どのような理由で就職先を選んでいるか、そこで何を實現したいかなどを具体的に話していた」と。学生のそうした主体性を認めていただきうれしく思います。

私自身、2001年から長崎県立大学の教壇に立ち、学生たちの真面目さ、実直さを評価していました。最近では、それに自発性や行動力が加わってきています。キャンパス内では、学生たちが自ら集まり、課題について話し合ったり、授業での発表の準備をしたりする姿がよく見られる。まさに主体性を重視する教育が着実に浸透してきていると感じます。

学生からの声

“一人一人考えが違って当たり前”
そう思えるようになったことが収穫

荒木 瑞姫さん

長崎県立大学
国際社会学部
国際社会学科
4年

長崎県立大学を選んだ理由は、座学だけでなく、学外での学びも充実していると知ったからです。今、分からないことは何でもネットで調べられますが、例えば離島でのフィールドワーク「長崎のしまに学ぶ」では、求められているのは「単なる観光振興ではなく、若者不足の解消である」。そんな一段階深い、リアルな課題が見えてきます。現地に足を運び、生の声を聞くことがいかに重要かを実感させられました。

チームで動画を作った3年次の「映像制作演習」も印象に残っています。映像制作の技術や知識がほとんどなく、それぞれ考えも違う中、撮影のテーマや内容を擦り合わせていく作業は大変でしたが、だからこそ完成した時は大きな達成感を味わうことができました。私はもともと人に合わせるタイプでしたが、意見を言わないと自分のやりたいことが埋もれてしまうと思い、自ら発言するようになりました。“一人一人考えが違って当たり前”。そう思えるようになったことは私にとって大学での大きな収穫です。

卒業後は、地元の新聞社へ就職することが決まっています。大学で身に付けた自分で考え、行動する力を生かし、長崎県の魅力を多くの人に伝えていきたいと思っています。



撮影や編集をゼロから勉強し、県内の自然をテーマにした映像作品を制作。どうすれば地域の山や川を魅力的に表現できるか、チームで工夫を重ねた。